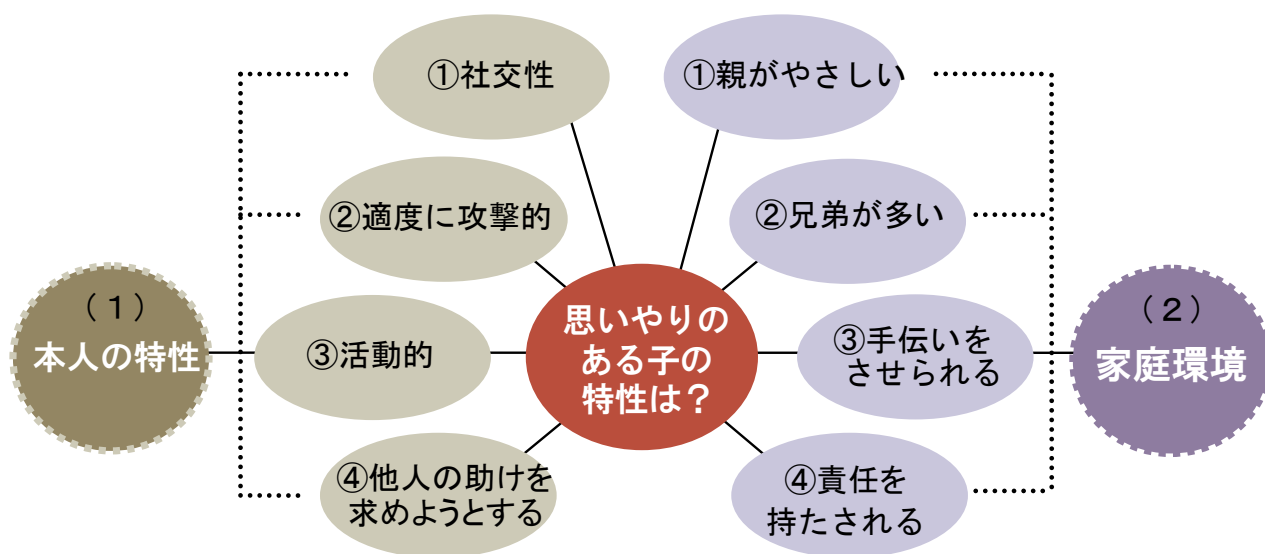


住民流 福祉教育入門



住民流福祉総合研究所<代表・木原 孝久>

住所・埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 1476-1

電話・049-294-8284

ホームページ <http://juminryu.web.fc2.com/>

目次

<序章> 生徒に「福祉」を教えるということは<2>

<第1章> 「やさしい子」とは？<3>

1. 「福祉教育」とは？<3>
2. では「やさしさ」のある子とは？<4>
3. やさしさの三段論法<5>

<第2章> 生徒にやさしい学校づくり<6>

1. 「生徒にやさしい学校」とは？<6>
2. 生徒の人権が守られる体制づくり<7>
3. 「生徒の主体性を大事に」とは？<7>

<第3章> 自分にやさしい生徒づくり<11>

1. 「自分にやさしい」とは？<11>
2. 子どもも豊かな人生設計を<12>
3. 自分の問題さがしとその解決行動<15>
4. 当事者グループづくりという新課題<18>
5. 自力解決のためにこそ自立訓練を<20>
6. 「助けを求める」ことができるか？<21>

<第4章> 人にやさしい生徒づくり<24>

1. 「他人の困りごとが見えにくい」理由<25>
2. 「人を大事にする」とは？<26>
3. 活動の心得<27>
4. 活動のチャンスー穴場はここだ！<30>

<序章>

今、生徒に福祉を教えるということは

●「やさしい思いやりの心を育むこと」なのか？

NHKテレビを見ていたら、ある小学校の授業風景が映っていた。突然、先生が「せーの！」と促すと、生徒が一斉に叫んだ。「助けてー！」 私は思わずつぶやいたものである。「やっと、ここまできたか…」。

長い間、福祉教育とは、つまり児童生徒に「福祉」を教えるには、ボランティアをしてやさしい思いやりの心を育むことだと関係者は考えていた。だから現場の先生も、とにかくボランティアをさせればよいと思い込んでいた。

●「死なないで！」と文部科学省が声明を発する緊急事態

時代は激変した。子どもは学校から家までのわずかな距離の間に誘拐されたり、傷つけられたりする危険この上ない社会になって、国も自治体も、したがって学校もようやく「自分を守る」教育の必要性を感じ始めた。いじめ自殺が相次ぎ、「死なないで！」と文部科学省が声明を発し、大新聞が一面に「いじめられている子」へのメッセージを連載するほどの緊急事態になった。やさしさ教育の前に、まずもって自分を大事にし、自分の身を守る教育がいかに重要か、社会はやっと気がついた。

●「福祉」の全体像を児童生徒に理解させる必要が

ここで改めて福祉教育とは何を教えることなのかを、根本から考え直す必要がある。福祉とは他人へのやさしさでもある一方で、自分を大切にすることでもある。それらを包含した「福祉」というものの全体像を児童生徒に理解させる必要があるのだ。

当然、学校のあり方も変わってくる。いじめが起きても調べず、公表せず、報告せず、自己保身に汲々としている学校は、子どもに「福祉」を教えるのに不適というより仕方がない。子どもを大事にする学校から、自分を大事にし、人をも大事にする児童生徒が生まれる。この原則は譲れない。

「やさしい子」とは？

1. 「福祉教育」とは？

(1)福祉教育実践校の「教育方針」を見ると…

ある県の、福祉教育モデル校の実践報告書を目にしたことがある。70～80校の学校の「教育方針」のところだけを読んでいったら、それらの学校の「福祉教育」の目指すところが、「思いやりの心を育む」という点で完全に一致していた。

(2)「子に期待することは？」と親に問えば…

わが子がどんな人間に育ってほしいのかを親に問うたアンケート調査を見ると、「良い成績をとって、良い学校へ」というのもあるが、トップはなんと「やさしい思いやりのある子に育ってほしい」だった。

おそらく本音なのだろう。としたら、学校で福祉教育を実践するのは、こうした親の願いに即したものとなる。

(3)「福祉の心」とは「思いやりのある心」なのか？

しかし、改めて考えてみると、はたして「福祉の心」とは、「思いやりの心」と同義なのか。たしかに「福祉」と言うとき、人々は「心」「愛」「やさしさ」などという言葉思い浮かべる。福祉＝やさしさだと、だれもが考えてしまっている。

たしかに、その部分もあるにはあるが、それだけではない。「福祉」の構造はもっと複雑だ。ということは、「福祉教育」の構造もまたもう少し複雑になるのだ。

2. では「やさしさ」のある子とは？

学校や親が求めている「やさしい子」というのは、実際にはどんな子なのか。どんな性格特性を持ち、どんな家庭環境で育ったのか。

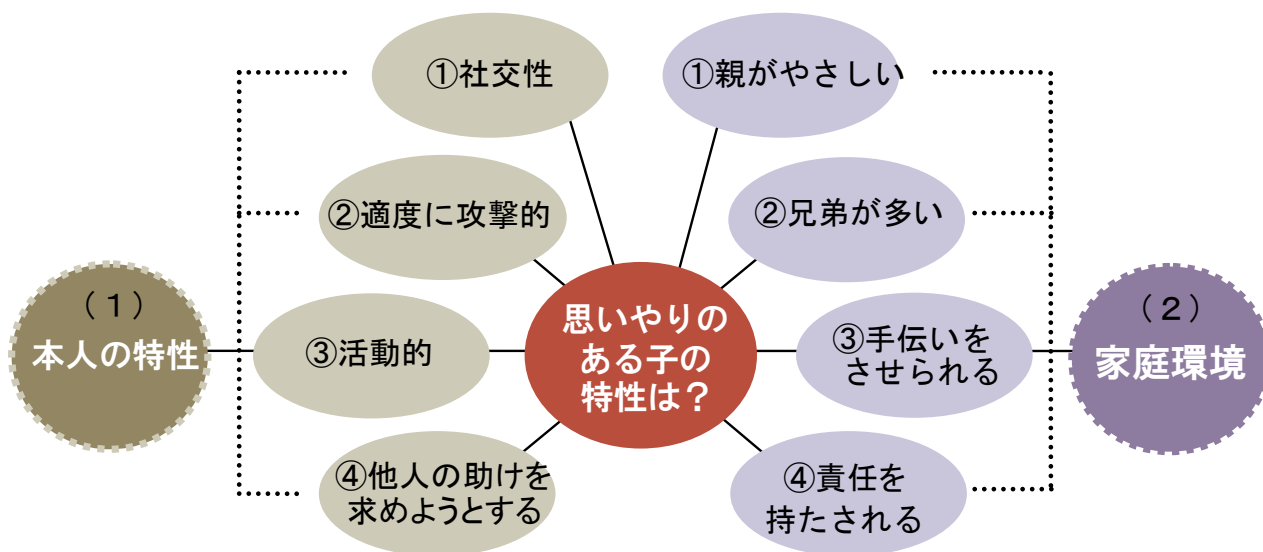
(1) アメリカにおける「向社会行動」の研究

格好の調査結果を見つけた。アメリカで「向社会行動」の研究が行われている。「反社会行動」の反対だから、まあ「やさしい行為」と言ってい

小学生などで、特に「やさしい子」と言われている子をピックアップし、その子の家庭環境や性格特性を調べたら、図のような結果が出た。左が本人の性格特性、右が家庭環境である。

性格特性で興味深いのは、1つは②の「適度に攻撃的」という点。「攻撃的」とも言えるほど相手に積極的に関わる、ということか。それ位のエネルギーがあるのだ。

もう1つが、④の「他人の助けを求めようとする」という点。他人にやさしい子は、自分も大事にする。だから自分が困った時は、すすんで他人に助けを求めようとするのだろう。「自分にやさしい」と「他人にやさしい」は、一枚の銅貨の裏表になっているのかもしれない。ここに「やさしさ」の意外な奥深さがほの見える。「助け上手」は、「助けられ上手」でもあった！



3. やさしさの三段論法

(1) 灰谷健次郎さんは言っていた。「学校」とは…

- ① 生命の畏敬を教える場
- ② ヘルプレスな子を支える場
- ③ 生きる力を与える場
- ④ 子どものやさしさがはたらく場

児童文学作家の故灰谷健次郎さんが『教えることと学ぶこと』という対談集の中で、子どもの「やさしさ」について触れていた。

彼は、「学校」はどのような所なのか、という問いに対し、上記の4点を指摘。私はこれを次のように意識してみた。

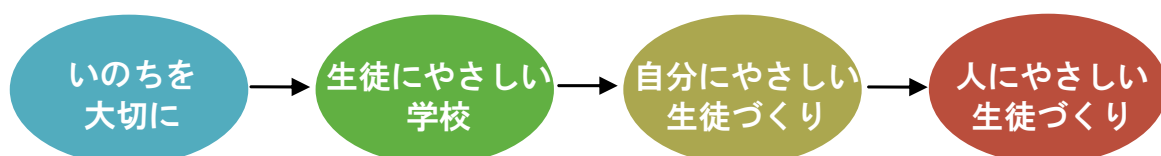
①いのちの大切さを教える所、②子どもにやさしくする所、③自分を大事にすることを教える所、④子どもの「やさしさ」を育む所。

(2) 4者には因果関係がある？

もしかしたらこの4点は、以下のような因果関係になっているのではないか。

①「いのちを大切に」することを教える学校は、まずもって②子どもにやさしい環境をつくる。その環境の中から、③自分にやさしい子が育つ。そして、その子が④人にやさしくなる。

「いじめ自殺」事件などが起きると、生徒に「いのちを大事にするように」と説くが、そのためには、生徒にやさしい学校をつくる一方で、生徒に自分自身を大事にすることと、他者を大事にすることを並行して教える必要がある。しかもそれぞれの中味はいずれもかなりバラエティーに富んでいる。ずばり本書が説いていることを実践すれば、それが「いのちを大事にする教育」ということになる。

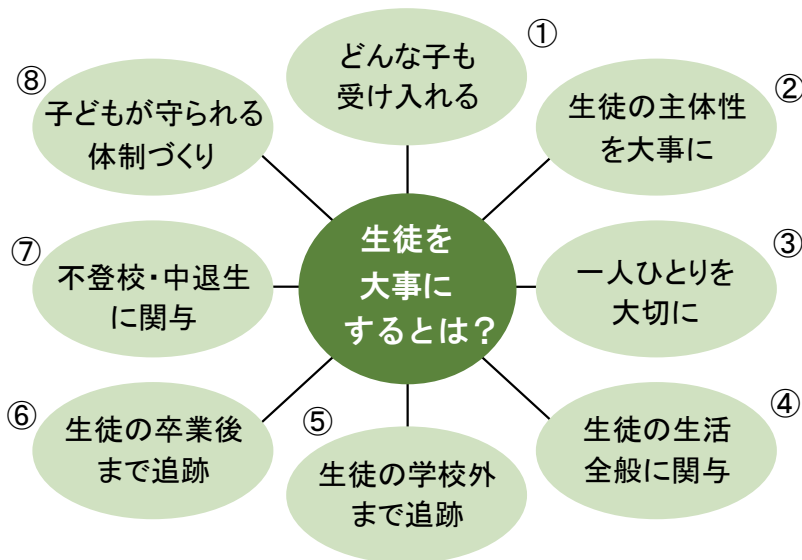


<第2章>

生徒にやさしい学校づくり

1. 「生徒にやさしい学校」とは？

「やさしい生徒」をつくるには、まず、生徒にやさしい環境をつくらねばならない。これが、福祉教育をすすめる時の前提条件だ。それには、どんな条件を具備すべきなのか。



ここに8項目並んでいる。

①は、障害児もきちんと受け入れ、排除しないか。受け入れるということは、そこで安心して学べる環境を用意することを意味する。

②生徒を学校の主役として遇しているか。

③生徒をマスとして見ないで、その一人ひとりを大切に扱っているか。

④「学習」のことだけでなく、「生活」の全般について気配りをしているか。

⑤学校内だけでなく、生徒を地域、自宅まで追跡し、気配りをしているか。

⑥在学中だけでなく、卒業した後も関わり続けているか。

⑦中退した生徒、不登校の生徒も見捨てず、関わりを続けているか。

⑧生徒（の人権）が守られる体制をつくっているか。

2. 生徒の人権が守られる体制づくり

前項の⑧生徒が守られる体制づくりとは、具体的にどんなことをするのか。以下に8項目を並べてある。②③④がそのための人材配置。⑤⑥⑦⑧は生徒を学校、学習、学校生活の主体者として遇するということだ。

子どもの人権が守られる体制づくり－8つの要件

- ①校内福祉センターを設置しているか？
- ②ソーシャルワーカーを配置しているか？
- ③スクールボランティアを導入しているか？
- ④教育オンブズパーソンを設置しているか？
- ⑤生徒を学校運営に加えるように努めているか？
- ⑥生徒主体の学級運営を指導しているか？
- ⑦生徒による教師の評価を認めているか？
- ⑧子ども自身による相談活動を校内で実施しているか？

3. 「生徒の主体性を大事に」とは？

(1) 子どものことは子どもが考えるもの。「子ども発」の発想

「生徒にやさしい学校」の中の「②生徒の主体性を大事にする」をもっと具体的に説明してみよう。子どものこと（問題）は子どもから発する—「子ども発」と名付けてみた。ここでは、「子どもの側から発する言葉」として考えてみよう。

5つの項目と、その具体例を並べてある。一人の人間としてきちんと扱うなら、「町内会だより」や市町村の広報誌に子どものページがあっがいい。喫茶店だって、子ども向けのものがあっがいい。実際、都内にはそのような店ができています。

③子どもが一人ひとり違うということを認めなければならない。服装だって、各自に合ったものを着る権利がある。本来、どこで学ぶのかも、各自で決めることができなければならない。

④子どもの問題を勝手に大人だけで議論し、解決してしまうのではなく、子どもに考えさせ、解決させるべきだ。「いじめ」の問題しかり、「校則」の問題しかり。ある高校で、社会科の教科書がわかりにくいと、生徒たちで独自に教科書を作ってしまったという事例もある。

①一人の人間として扱って

- ・町内会だよりも子ども向けも
- ・子どもの権利宣言をわかりやすく
- ・子ども向け喫茶店を！

②人としての責任も果たしたい

- ・ゴミの減量化に協力
- ・まちの美化活動に参加したい
- ・子どもの交通事故防止事業に参加したい

③私の個性も尊重してほしい

- ・私に合った服装をしたい
- ・自分の進路は自分で決めたい
- ・私は学校に行かない

④私(たち)の問題は私たちで

- ・いじめの問題は自分たちで取り組みたい
- ・生徒の悩みは私たちで受け止めたい
- ・先生の暴力も私たちで対処したい
- ・校則の問題は生徒が考えたい
- ・教科書は自分たちで作りたい
- ・授業のあり方は私たちで考えたい

⑤私に関わることは私も考える

- ・DVの問題を私たちも考える
- ・親による児童虐待問題も
- ・単身赴任、過労死、リストラの問題にも関わりたい

(2) 『子ども発』を認め、支援する」とは？

子どもの主体性を認めるには、子どもにどう対応したらいいのか？

先程は、「子ども発」を子どもの側からの主張・要望という観点から取り上げたが、今度は大人の側から、「子ども発」をどのように受け止め、それをどのように実践するか—という観点から、10項目並べてみた。

ここで重要なのは、⑤のように、判断の素材を提供したり、⑥選択の受け皿を用意してあげることだ。

かなり思い切った「措置」の事例も並んでいるが、これらはすべて実

際実践されたものである。「子ども発」の対応は、私たちが考えている以上に進行しているのだ。

①子どものかぼそい声を聞く

- ・「チャイルドライン」
- ・ いじめ110番

②子どもの願いを先取り

- ・ 教師が体罰体験
- ・ 夜間学校生の声を本に
- ・ 子どもの目から見た映画づくり

③子どもに言わせてみる

- ・ 通信簿で異議申し立て容認
- ・ 日教組大会で私たちも発言
- ・ 学校運営で生徒に聞く
- ・ 入試に自己申告制

④自分で判断させる

- ・ 内申書の公開
- ・ コース選択制
- ・ 生徒による授業評価

⑤子どもに判断材料を提供

- ・ 市の広報に子ども版
- ・ 子ども向けタウン誌
- ・ 子どもにも「告知」

⑥子どもの選択の受け皿を用意

- ・ フリースクール
- ・ ホームスクール
- ・ 通信制学校

⑦子どもにやらせてみる

- ・ 中学生がいじめカウンセラー
- ・ 子ども民生委員、ジュニア福祉員を小中学生にやらせる
- ・ 高校生がベビーシッター役
- ・ 性の相談を高校生の手で

⑧子どもを主催者に

- ・ 生徒の手で卒業式
- ・ 修学旅行を生徒主体で

⑨子どもにも責任を取らせる

- ・ 刑事罰の対象年齢を下げる
- ・ バイク認可。ただし自己責任で
- ・ ゴミ減量に子どもも参加させる

⑩子ども発が守られる体制作り

- ・ 子どもの権利オンブズマン
- ・ 子どもの人権弁護団

福祉教育はやばいのだ

■生徒会が校長批判の新聞発行

「子ども発」—子どものことは子ども自身が考え、実行する。そのように大人が仕向けていく。これが昨今の子どもに対する大人の関わり方の大きなトレンドになっている。これは学校側にとっては、極めて危険な事態を引き起こすこともありうる。「校則は自分たちで考えたい」と生徒が主張した時、それを認めることができるか。

高校の生徒会が校長を批判する校内新聞を発行したところ、学校側が「事前許可を得ていない」として回収、一部を焼却処分したという。その記事とは、「校長の生徒に対する人権侵害の真相」と題し、制服問題を巡る交渉で、校長から「嫌ならほかの学校に行け」と言われた生徒が不登校になった経過を掲載したものだ。

■「福祉学習は危険だからやめなさい」

校長への非難、という点で学校側は気に入らなかったのだろうが、しかし生徒の行動はまさしく福祉学習そのものではないか。仲間の生徒の中から福祉問題を見出し、それを生徒全体のものとして共有、みんなで議論し、結果を新聞に公表する。それを抹殺するのは、「福祉学習は危険だからやめなさい」と言っているようなものである。この高校に福祉教育をする資格はない。

埼玉県のある高校生が、自分たちが学んだ社会科の教科書があまり満足のいくものではないと、後輩のために生徒たちで作ってしまった。これも実質は福祉学習そのものである。これを仕向けた教師に聞いてみたいと学校側に尋ねたら、「そういう名の教師はわが校にはいません」。

■通信簿の異議申し立て受付ける教師

長野県のある町にこんな教師がいた。彼は通信簿を配った後、「異議申し立て」を受け付けるのだと。「ぼくは社会科はかなり頑張ったから、3でなく4のはず」などと主張させ、たしかにそうだと納得したら4に上げてあげる。約半数の生徒が異議申し立てをしていた。「君らは、優しい先生だから甘えているんじゃないの？」と水を向けたら、そんなことはないと言い張った。「これは絶対間違いない」と自信のある科目だけを申し立てるのだと。「子どもの主体性を尊重する」こと一つとっても「言うは易く」、福祉教育はやばいのだ。その覚悟でかからなければならない。

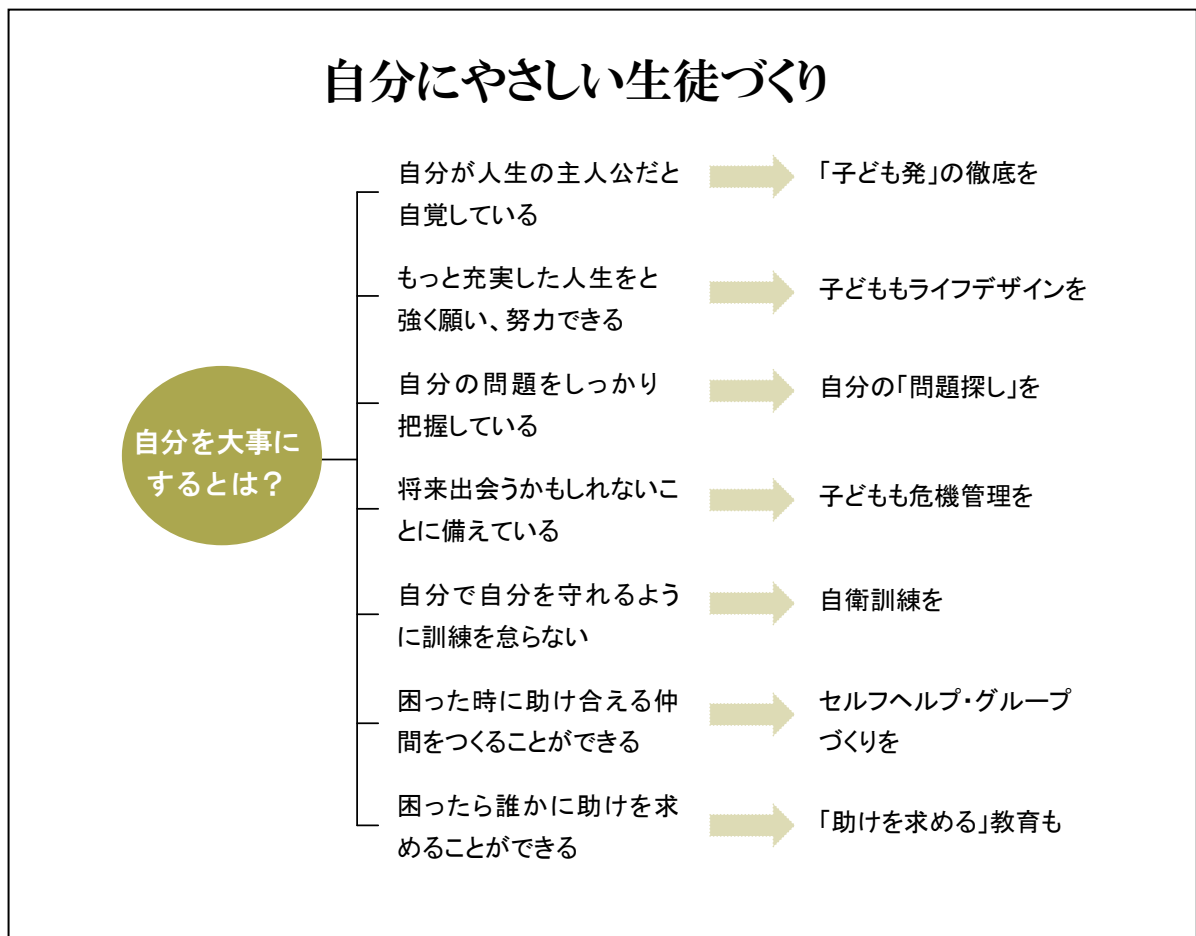
<第3章>

自分にやさしい生徒づくり

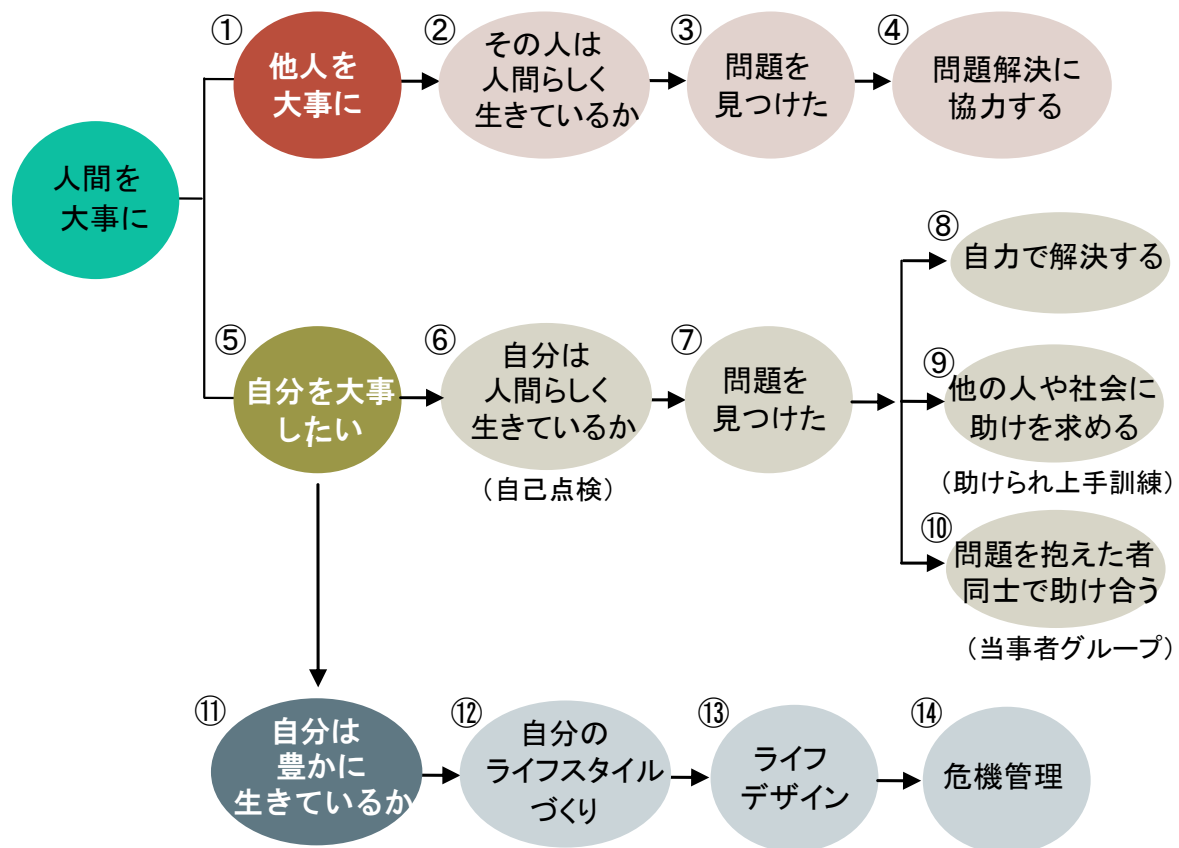
1. 「自分にやさしい」とは？

この章では、三段論法の第二段目—自分にやさしい生徒づくりを取り上げる。自分を大事にするとは、具体的にはどうすることなのか。

ここに7項目並べてある。その右に、「だからどうするのか」を解説してある。いずれもが「自分を大事にする」ために不可欠な、極めて重要な項目である。



次のフローチャートは、「自分を大事にする」行為を一連の行為に分解してみたものだ。



まず⑥自分は人間らしく生きているか、を点検することから始める。そして⑦「問題」(人間らしく生きるのを阻む要素)を見つけたら—そこで3つの選択肢が出てくる。⑧自力で解決できればいいが、それが不可能な時、⑨他の人や社会に助けを求めるか、⑩同じ問題を抱えた者どうしで連帯し、助け合わねばならない。アメリカの向社会行動の研究で出てきた「やさしい子」の要件の1つに「他人に助けを求めようとする」とあるのは、この⑨ができる子のことを言う。

ここでわかるとおり、「福祉をわかる(体得する)」とは、「人を助ける」技術と「人に上手に助けてもらおう」技術の両方に精通することが求められるのだ。

2. 子どもも豊かな人生設計を

(1)自分を大事にするとは、もっと豊かな人生を送ることも

前述のフローチャートの⑤から、もう1つのルートがある。自分が人間らしく生きるのを阻んでいるもの（問題）だけでなく、⑪自身、もっと人間らしく生きようと努めているか？も考えなければならないのだ。

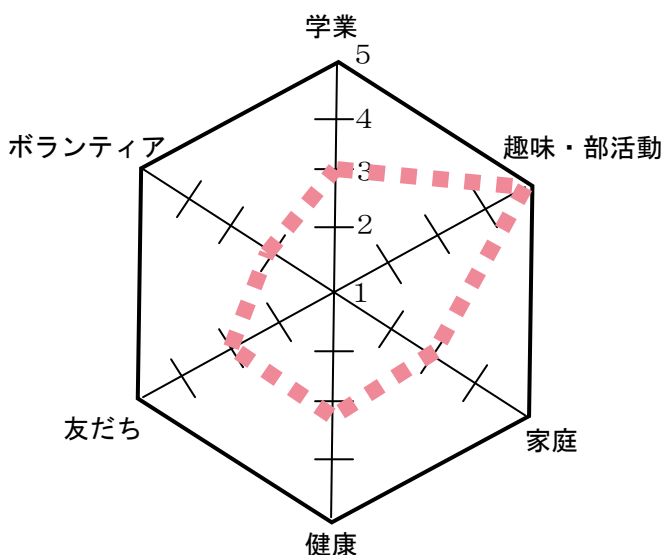
言い換えれば、自分は豊かに生きているのかを点検することである。その上でまず、⑫自分のライフスタイルを決定する。こういう生き方を選択したい、ということだ。そしてそのライフスタイルに基づいて、⑬ライフデザインをする。

これだけでは終わらない。これからの人生、良いことづくめとは限らない。山あり谷ありだ。そこで、これからの人生にどんな「谷」があるかを予測し、それに備えることも大切だ。これが、⑭危機管理である。

自分を大事にするのは、この2つのルートの双方ともを充足させなければならないのである。

「人を助ける」ことは、それほど難しくないが、自分を大事にするための一連の行為のいずれもが、意外に難しい。ということは、福祉教育という名で行われる教育の柱は、むしろ「自分を大事にする」行為のプロセスをしっかりと実行させることにある。自身の抱えている「問題」を意識、自覚することは、極めて難しい。

(2)まず子ども向け「豊かさ測定ダイヤグラム」で測ってみよう



■例えば趣味が充実している生徒なら
左のように自分の趣味にのめり込んでいる生徒なら、同じ趣味を持つ人とグループを作ってふれあえば「友だち」ができ、勉強の教え合いをすれば学業も向上する。趣味を社会に生かす機会もある。自分の得意なものを利用して、他の項目を充実させていけばいい。

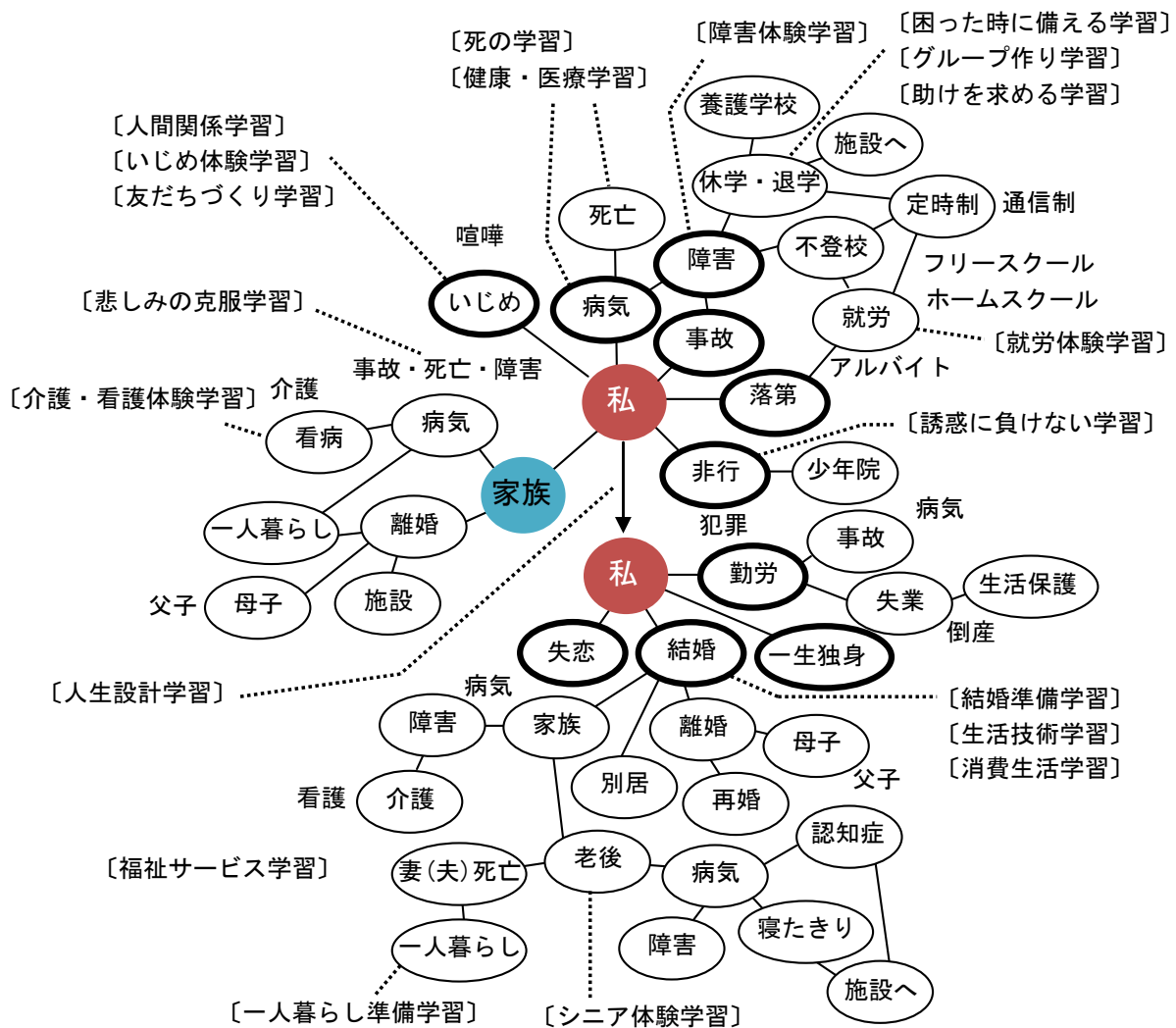
さて、「豊かさ」は、どうやって測ったらいいのだろうか。おおよその目安として、6つの要件を掲げた。その一つ一つを、「5」特に良い、「4」まあまあ良い、「3」どちらとも言えない、「2」「やや悪い」、「1」非常に悪い—という5段階で考え、印をつけてみる。そして、それらの印を線で結べば、その子の「いきいき人生度」が見えてくる。

さらに、その結果をよく検討してみれば、そこからその子の人生をより豊かにするための方向性も見えてくる。たとえば、自分の趣味にのめり込んでいる子なら、同じ趣味を持つ子とグループをつくってふれあえば「友達」ができ、彼らと勉強の教え合いもすれば、「学業」も向上する。その趣味を社会に生かす機会もあるはずだ（「ボランティア」）。

こういうふうにして、自分の好きなことを利用して、他の不十分な項目をもっと充実させていけばいい。一石六鳥作戦だ。

(3)困ることが起きる前に備えることも

前項で危機管理について少しふれたが、これからの人生で「困ったこと」が生じて、自身で克服できる力を育てていく—これが自立訓練である。いまの学校は、この種の教育にあまり関心がないようだが、それを福祉教育の一環としてやったらどうか。



3. 自分の問題さがしとその解決行動

(1)自分の「問題」に気づくのは、意外に難しい

人は、自分が「人間らしく生きる」のを阻む障害物からは目をそらしてしまふので、自分の問題に気付きにくい。そこで、自身の「問題」に気付かせる作業を課してみたらどうか。「問題」というのは、本人の欲求のレベルが上がるほど、たくさん出てくるし、反対に欲求のレベルが下がるほど、なくなってくる。

(2)高校生に聞いてみました—「学校生活の問題」

以下は高校生に自分たちの問題を考えさせてみた結果である。初めは「別がない」と言っていたのが、考えていくうちに、これだけ出てきた。

①通学

- ◆学校が遠い
- ◆傘さし運転
- ◆自転車置き場
- ◆交通事故

②教師との関係

- ◆生徒を信じていない
- ◆先生と意見が違う

③学校体制

- ◆校則を強制する
- ◆校則を守れない人がある
- ◆服装が乱れている

④勉強・授業

- ◆授業中寝てしまう
- ◆嫌いな科目に身が入らない
- ◆なぜ勉強をしなければならぬのか
- ◆将来何の役に立つのか

⑤生徒間の関係

- ◆家族の話題が出ない
- ◆挨拶をしない
- ◆いじめられる
- ◆ケガした友を助けられない
- ◆悩みを分かち合う人がいない
- ◆障害者への偏見

⑥受験

- ◆大学の情報が少ない

⑦部活

- ◆弱肉強食
- ◆強い人の意見に従ってしまう

⑧学校環境

- ◆学校がボロい
- ◆上履きが汚い
- ◆校内が汚い
- ◆ゴミの捨て場所

(3)「大きな自分事」という発想

自分の問題は仲間の問題であり、まち全体の問題にもつながる。それに対して協同で解決努力をすることで、「自分のため」と「他人のため」が一体化していく。たとえば、次のような「大きな自分事」があり得る。

①騒音公害

- ◆うるさい
- ◆生活しづらい

②働く場がない

- ◆就職できない

③居場所がない

- ◆どこで遊んだら…

④危ない町

- ◆交通事故が多い
- ◆道幅が狭い
- ◆自転車置き場がない

⑤交流がない

- ◆親以外の頼れる大人がいない

⑥施設が不足

- ◆老後が不安
- ◆病気になったら…

⑦高齢者が多い

- ◆若者が去っていく

⑧過疎の町

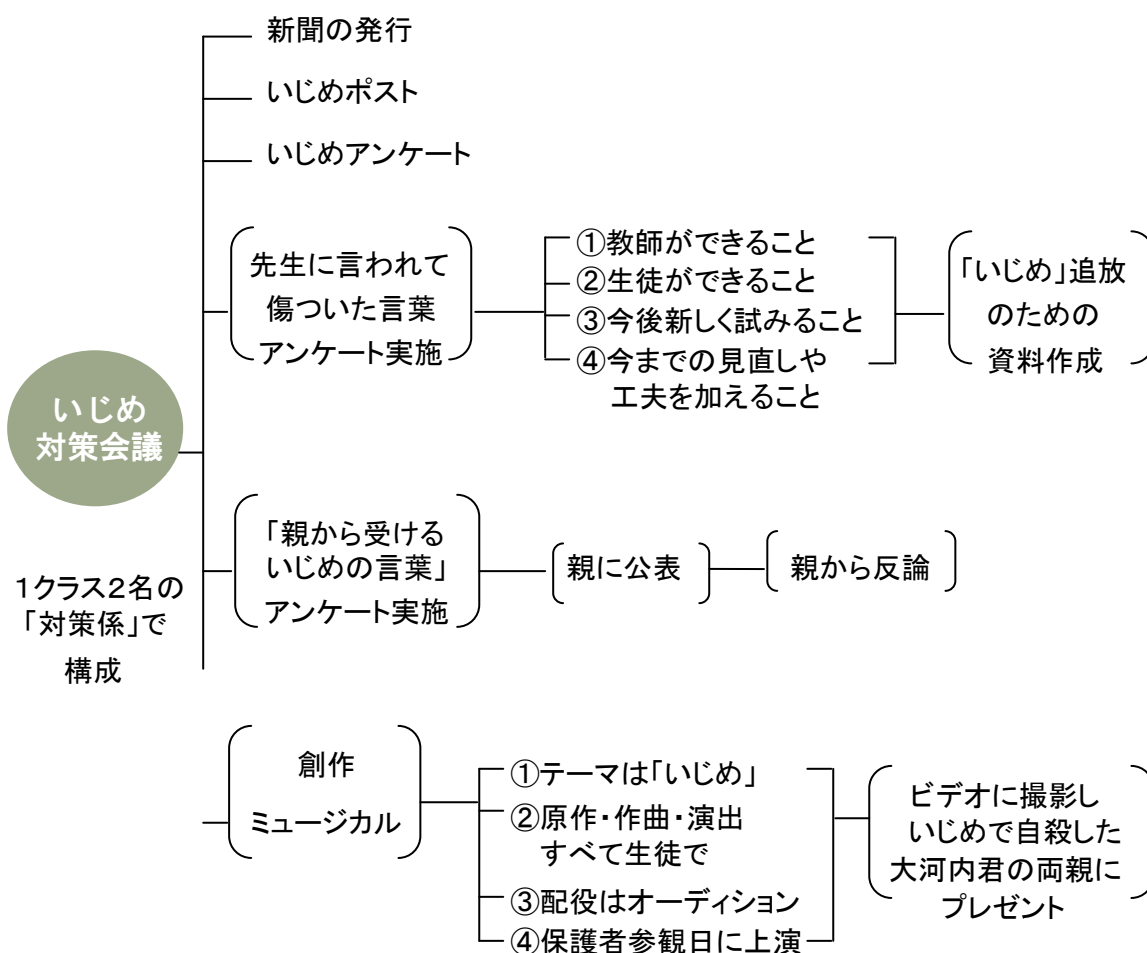
- ◆買い物などに困る

⑨地域紛争

(4)いじめの問題もこんなに豊かな活動に

たとえば「いじめ」の問題に、学校全体でどのように取り組むか。ある中学校の実践をフローチャートにしてみた。いじめ事件が実際に起きたことから、このように、まずークラス2名の「対策係」で構成された「いじめ対策会議」を開催する。そこで、いろいろな活動に取り組むのだが、「いじめ」のテーマを思いきって広げて、「先生に言われて傷ついた言葉」、あるいは「親から受ける言葉のいじめ」のアンケートを実施する。それに対する親からの反論も取り上げる。

それらをふまえて、最後は創作ミュージカル作り。「いじめ」の概念を広げて、これを各自にとって身近なテーマにしたり、芸術活動にすることで、楽しく深く考えさせるなど、創造性あふれる教育になっている。

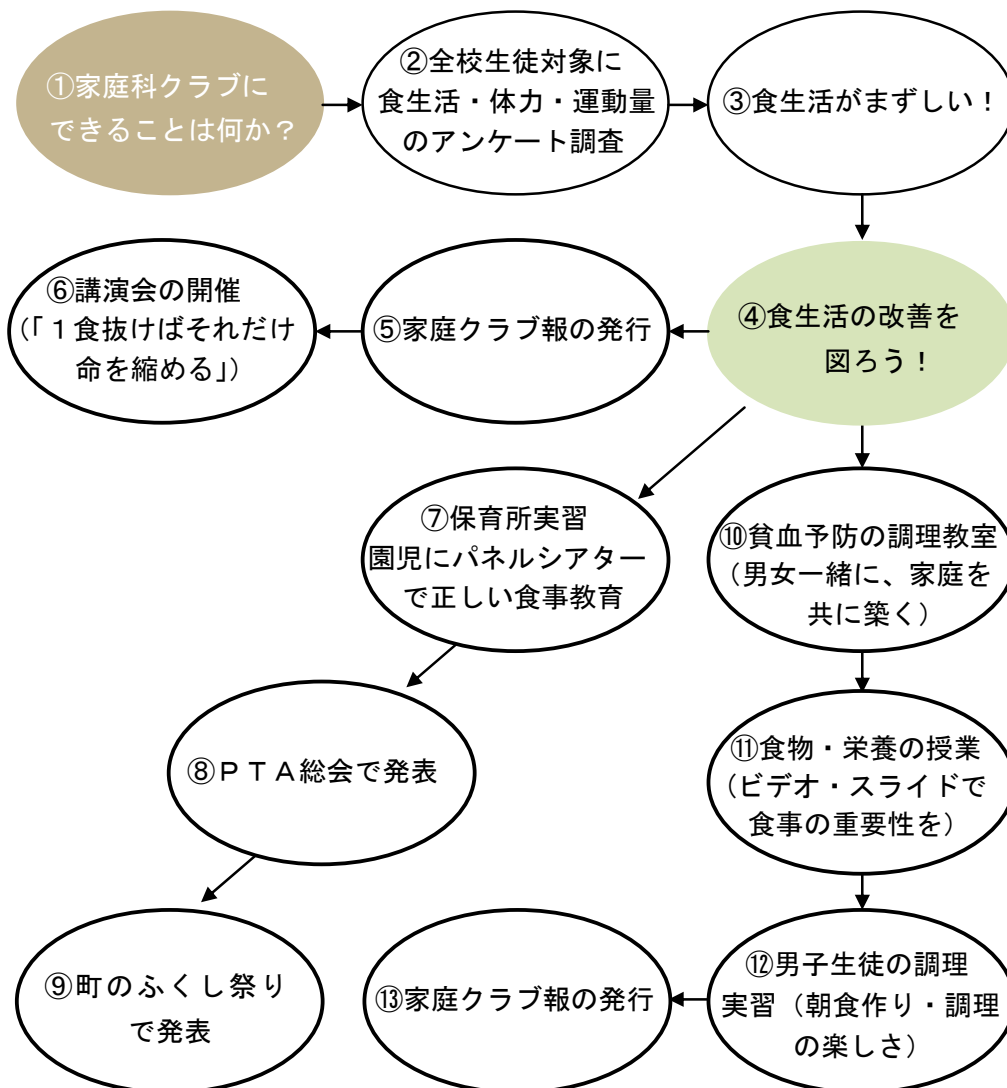


(5)自分たちの貧しい食生活に取り付いた家庭科クラブ

ある高校の家庭科クラブの活動であるが、身近なテーマ1つを選んで、これに徹底してこだわるとともに、それを思いきって押し広げることで、豊かな福祉教育活動になっていく。

また、生徒だけの問題にしないで、PTAを通して父母にも、さらに福祉祭りに提示することで全市民にまで、学習の成果を伝え、啓発活動を展開している。

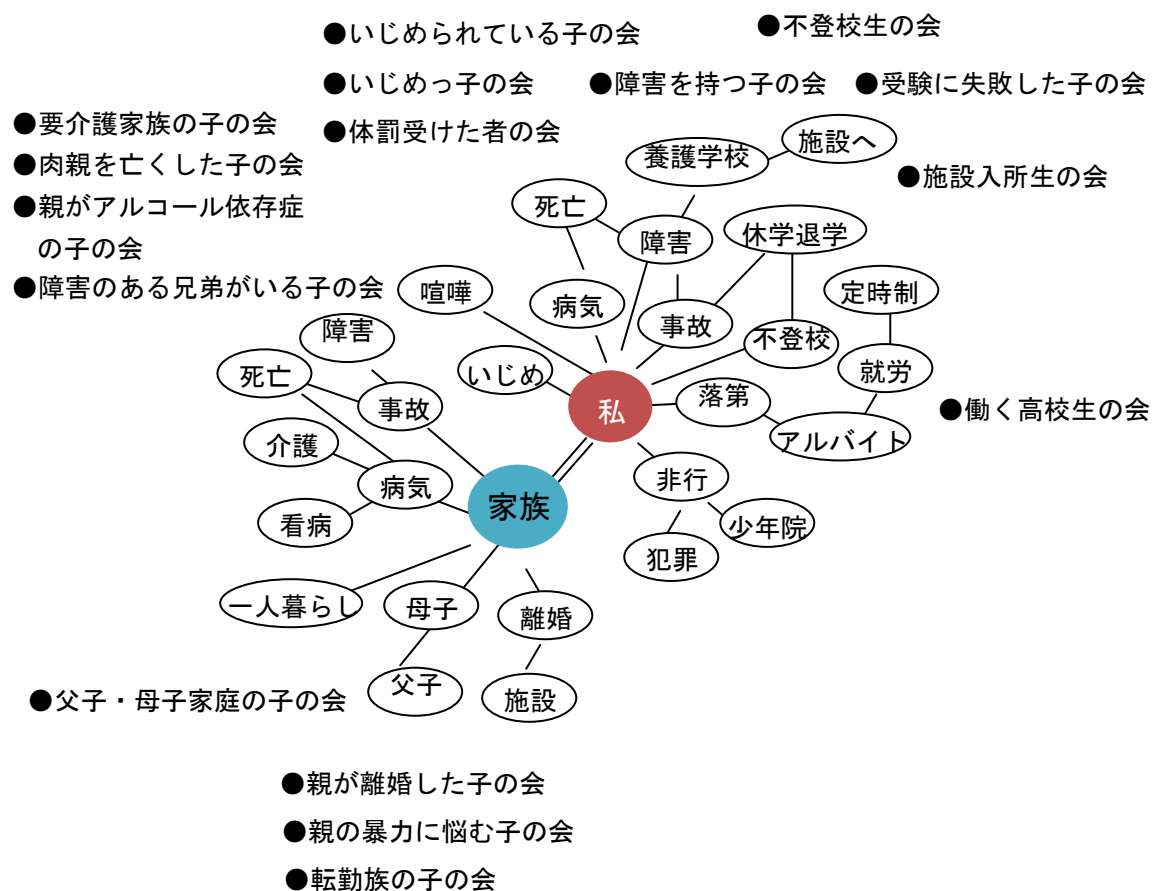
活動内容を見ても、調査、講演会、広報誌、研究、実習など、多彩な方法を駆使している。



4. 当事者グループづくりという新課題

困った時、本人にとって一番入りやすいのは、同じ問題を抱えた人と協同する（助け合う）ことである。いま、大人の間では、これが爆発的に広がっている。子どもだって、できないことはない。

子どもは子どものやり方でセルフヘルプグループを作っていくのを支援することも、福祉教育の一環だ。以下、あり得る「グループ」をリストアップしてみた。



<セルフヘルプグループづくりのコツ>

セルフヘルプグループづくりの効果は大きいですが、子どもの力だけではできない。大人が後方から支援してはじめて可能になる。グループができたら、閉鎖的なものにせず、たえず社会へ開かれたグループにしていくことが大切だ。

5. 自力解決のためにこそ自立訓練を

問題が生じたとき、できるだけ自力で解決したいというのが人情だ。そのためにこそ、自立訓練をほどこさなければならない。

「助けられ上手」の腕を身につけるのも、「セルフヘルプグループづくり」の腕を身につけるのも、広義の「自立訓練」である。命の大切さを教えるということは、ただ単に講義をすることではなく、このような一連の自立訓練をすることでなければならない。こうすることで「命の大切さ」を体感できるようになるのだ。以下は実際の事例である。

①権利教育

- ◆司法を使いこなして権利を守る教育

②裁判教育

- ◆ティーンコート（子ども裁判所）
（十代の生徒に裁判官の役を）

③自活教育

- ◆共同生活をしながら学校へ通う
- ◆ストリートスマート（社会で生き抜く）
- ◆「お料理手品」で料理を学ぶ

④経済体験教育

- ◆商店街や医院での体験で進路学習
- ◆園児や小学生対象に起業家養成塾
- ◆子ども向け金銭管理の本

⑤政治教育

- ◆子ども議員が公園建設
- ◆子ども議会

⑥護身教育

- ◆危険な状況から逃げる方法を学ぶ本
「いじめをやっつける本」
- ◆ネット利用のルールやネット犯罪から身を守る教育
- ◆子どもへの暴力防止プログラム

⑦人間関係教育

- ◆支え合い関係を学ぶピア・サポート
- ◆怒りのコントロール教育
- ◆中学校に「コミュニケーション科」

⑧健康教育

- ◆正しい食生活や料理を学ぶ

⑨死の教育

- ◆死を語るいのちの授業
- ◆子どもへのインフォームドコンセント

⑩哀しみの教育

- ◆親しい人を失った時に、「正しく」
哀しむことができるように

⑪障害体験教育

- ◆障害の疑似体験

⑫性教育

- ◆学生が学生の性の相談にのる

⑬結婚教育

- ◆夫婦共同で行う子育ての意義や
親の役割を勉強
- ◆赤ちゃんを教室に呼んで子育て教育

6. 「助けを求める」ことができるか？

福祉教育の中で最も難しいのが、自分が困った時に上手に助けを求めることができる資質を養うことだ。弱者である子どもがまず教えられなければならないのが、この「助けられ上手」になることだ。

(1) 「助けられ上手さん」の要件

助けられ上手さんと言われる人には、共通の資質が備わっている。それは…

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| ① 普段から助け合える友達をたくさん作っておく | ⑤ 自分も人のためにできることはする |
| ② 普段から気軽に小さな助け合いを実践 | ⑥ 普段からボランティア活動をし慣れている |
| ③ 自分の悩みを気軽に打ち明けられる | ⑦ 人を惹きつける魅力がある |
| ④ 地域の福祉資源(制度)を十分知っている | ⑧ 「お礼」「お返し」の術を心得ている |

(2) 「助けられ下手さん」のために…

助けられるという行為は、じつは大変難しい。そこでまずは、「困ったとき助けを求められる相手」のリストを作らせるのはどうか。助けられ下手だけど、この人になら相談を持ちかけられるという相手を、クラスメートや隣人などの項目ごとにリストアップしておくのだ。

私のアドバイザー探し

困ったとき誰に助けを求めるか？

私たちは、意外にも自分が困ったときの備えをしていない。普段から「自分が困ったときは、まずあの人に、次はあの人に助けもらおう」と決めておくぐらいの準備が必要である。日ごろから人間関係を大事にし、たくさんの友だちがいるところという場合に心強い。自分にとっての「アドバイザー」を下の欄にリストアップしておこう。

	名前	職業など	電話番号など連絡先
1			
2			
3			
4			
5			

自分を力づける練習も

本当に困ったとき、頼りになるのは自分自身だ。だから普段から自分で自分を力付ける練習をしておかなければならない。自分がだめな人間だと思ってしまったとき、落ち込んだとき、自分で自分を励ますために、こんな欄を設けて、記入しておいたらどうだろうか。

「困ったこと」が起きたとき、私たちは気が動転し、自信を喪失しがちである。そんな時のために、自分を励ましてくれるような言葉を書きとめておいたらどうか。「あの人のあの言葉、あの小説のあの一章が印象に残った」というのが、あなたにもいくつかあるのではないだろうか。

いじめ自殺を教材にいのちの教育を

■いじめ防止にエンパワメント法

大阪府教育委員会では、府内の公立小中学校で、いじめ防止策として、暴力から身を守る力を引き出す教育プログラム「こどもエンパワメント支援指導」を導入するという。NPO法人「女性と子どものエンパワメント関西」（兵庫県宝塚市）などと共同開発した（「毎日新聞」）。

「エンパワメント」とは、「内なる力を引き出す」という発想で、ゲームやロールプレイなどを通じて、暴力を防ぐコツを教える。教委は防犯用に導入したが、いじめにも有効と判断したという。

人間関係で不快に感じたときは「嫌だ」と意思表示したり、相手の目をしっかり見るなど、暴力を防ぐコツを伝授。自分や同級生の良いところや異なるところなどを見つけあい、一人ひとりが大切な存在だと気づかせるのだという。

■校内で異年齢児でグループ活動

「ピア・サポート」という手法も導入され始めた。ピアは仲間、サポートは支援。異なる年齢の子どもたちが交流し、社会性の発達を支援するプログラム。

千葉県市川市稲越小学校が導入（「毎日新聞」）。一年生から六年生までが混じったグループを作り、六年生が一年生の世話をする。各種行事もグループで行動。清掃もクラス単位ではなくグループ単位にする。「グループの中で役に立っていることを認識できれば、自分の存在を確認できる」と同校校長が言っていた。

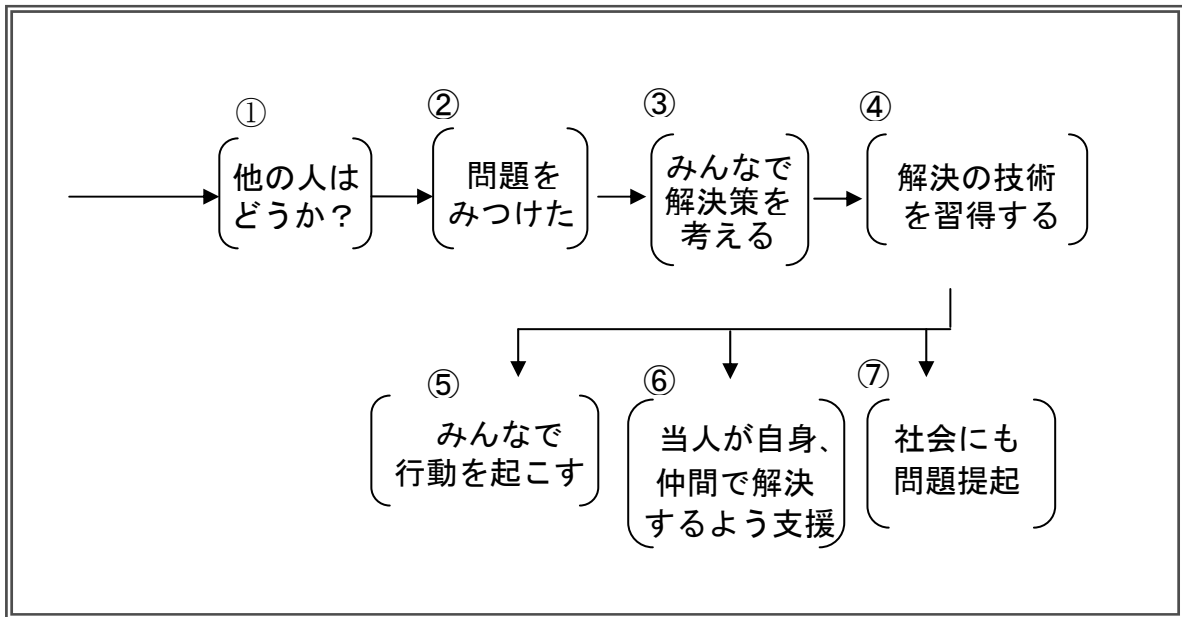
■「飛び降りる子に何と云うか？」

今までは「死」や「自殺」の問題には極力、生徒には触れさせないようにしてきた。それでいて「いのち」を教えようというのだから、全く矛盾している。いじめ自殺事件が頻発している今、ようやく方向転換が始まった。自殺した子の遺書や、いじめを止めなかった同級生の言葉を読ませ、自殺しかねない同級生と向き合わせるといった、「いじめや自殺をタブー視せず、考えさせる教育」に転換した学校も出てきた。

東京・中野区で起きた「鹿川君事件」の当時のクラスメートが事件の八年後に語った言葉を読ませたり、「飛び降りようとしている同級生にどんな言葉をかけられるか」といったテーマを生徒に投げかけたりと。ここまで来れば「いのち」の教育も本格的だ。

<第4章>

人にやさしい生徒づくり



ここから、一般に言われている「福祉教育」の課題—「人にやさしく」を取り上げる。ただ「やさしく」するだけが能ではない。

「やさしさ」という行動にも、一定のプロセスがある。たとえば上図の②(誰かの)「問題」を見つけたら、③みんなで解決方法を考えるというプロセスがあるが、「みんな」にもいろいろあるし、「みんな」に相談する前に、すぐさま自分で関わってしまうという場合もある。段取りからすれば、④解決の技術を習得するという行為も必要だ。そして、⑤⑥⑦が待っている。⑤の「みんな」にもいろいろある。クラブとか学校全体、近隣住民で、など。

⑥のように、問題を抱えた人自身で解決できるように支援するという方法もある。そのためにセルフヘルプグループづくりを手伝うという方法も。

⑦自分たちでは解決できない大きな問題は、社会全体に訴えるということも頭に入れておかねばならない。

1. 「他人の困りごとが見えにくい」理由

前掲のフローチャートで、意外に難しいのは、②の「問題」を見つけた一を実行する部分、つまり、困っている人の困り事が見えにくいということである。なぜ、そうなのか。

ここに6項目並べてある。①と②は、こちら側の問題。自身が豊かに生きていないと、相手のまずしさが見えない、とか。③と④は、こちらと相手の関係によって、困り事が見えなくなる「からくり」を取り上げてある。⑤と⑥は、問題を抱えている側の問題。これらの障壁をこえて「問題」を発見するのは、とても難しいということである。

①

①	〔	自分が「貧しい」と	〕	⇒	「自分を大事にすること」が先決。
		相手の貧しさが見えない			

②

②	〔	人権感覚を研ぎ澄まさない	〕	⇒	人間はもっと人間らしく生きる権利があるはずだと
---	---	--------------	---	---	-------------------------

③

③	〔	問題を抱えた人は	〕	⇒	だから、助けようとするよりも
		迷惑な人・ヘンな人に見えるやすい			排除しようとする

④

④	〔	あまりに身近な人の	〕	⇒	「グチ」を「福祉問題」として
		グチは聞き流しやすい			見られるセンスが必要

⑤

⑤	〔	問題を抱えた人は	〕	⇒	こちらが察してあげるしかない
		それを言いたがらない			

⑥

⑥	〔	問題を抱えた人は	〕	⇒	自分は問題を抱えていないと思いたがる
		自分の状態に気づかない			

2. 「人を大事にする」とは？

■ 「困り事」を解決してあげればよいというものではない

ここまで「人を大事にする」と簡単に言ってきたが、このこと自体、いろいろな内容を持っている。そのことを理解させる必要がある。その人の「困り事」を解決してあげればよいというものではないのだ。

助けてあげるよりも、本人自身、またはその仲間で解決できるように応援するとか、その人をグループに受け入れてあげることが問題解決につながるかもしれない。直接助けるよりも、その人が見込んだ人にそつと伝えてあげる方が喜ばれるかも知れない。その人の能力を開発し、人に尽くすことができるようにしてあげる方がいい場合もあるのだ。困ったことの解決より、豊かに生きることを支援するべき場合もある。

- | | | |
|---|-----------------------|--|
| ① | 困ったことを
解決してあげる | ◆自分の困り事に気付かせることも
◆社会にアピールしてあげることも |
| ② | その人の誇りを
守ってあげる | ◆ただ助ける一方ではなく、逆に助けてもらう
◆ミエミエで助けない |
| ③ | その人のあるがまま
を認める | ◆「障害があったっていいじゃないか」
◆「キミは今のキミのままで十分好きだよ」 |
| ④ | 自分(たち)で解決
できるように支援 | ◆セルフヘルプグループ作りの応援
◆自立訓練の手伝い |
| ⑤ | その人の能力を
引き出してあげる | ◆潜在している能力を見つけてあげる
◆キミは「もっと」できるはずだ！ |
| ⑥ | その人を仲間に
受け入れる | ◆障害があってもグループに入れてあげる
◆その人が入りたいグループに入れるよう、
仲介役をしてあげる |
| ⑦ | もっと豊かな生活が
できるように応援 | ◆本人は気付かないけど、本心は「もっと
豊かな生活がしたい」と思っているはず |

- ⑧ { その人が見込んだ人に伝えてあげる } ◆こっちで勝手に助け手を差し向けるのではなく、本人は誰に助けてもらいたいのかを察して、その人に伝えてあげる
- ⑨ { その人の主体性を大事にする } ◆本人は何を望んでいるのかを大事にする
- ⑩ { その問題解決の専門機関につなげる } ◆自分で解決してあげるよりも、その問題解決を専門にする人や機関につなげるのも、大切な役割

3. 活動の心得

「人にやさしく」の行動を起こすに際して、留意すべきことを14項目並べてある。

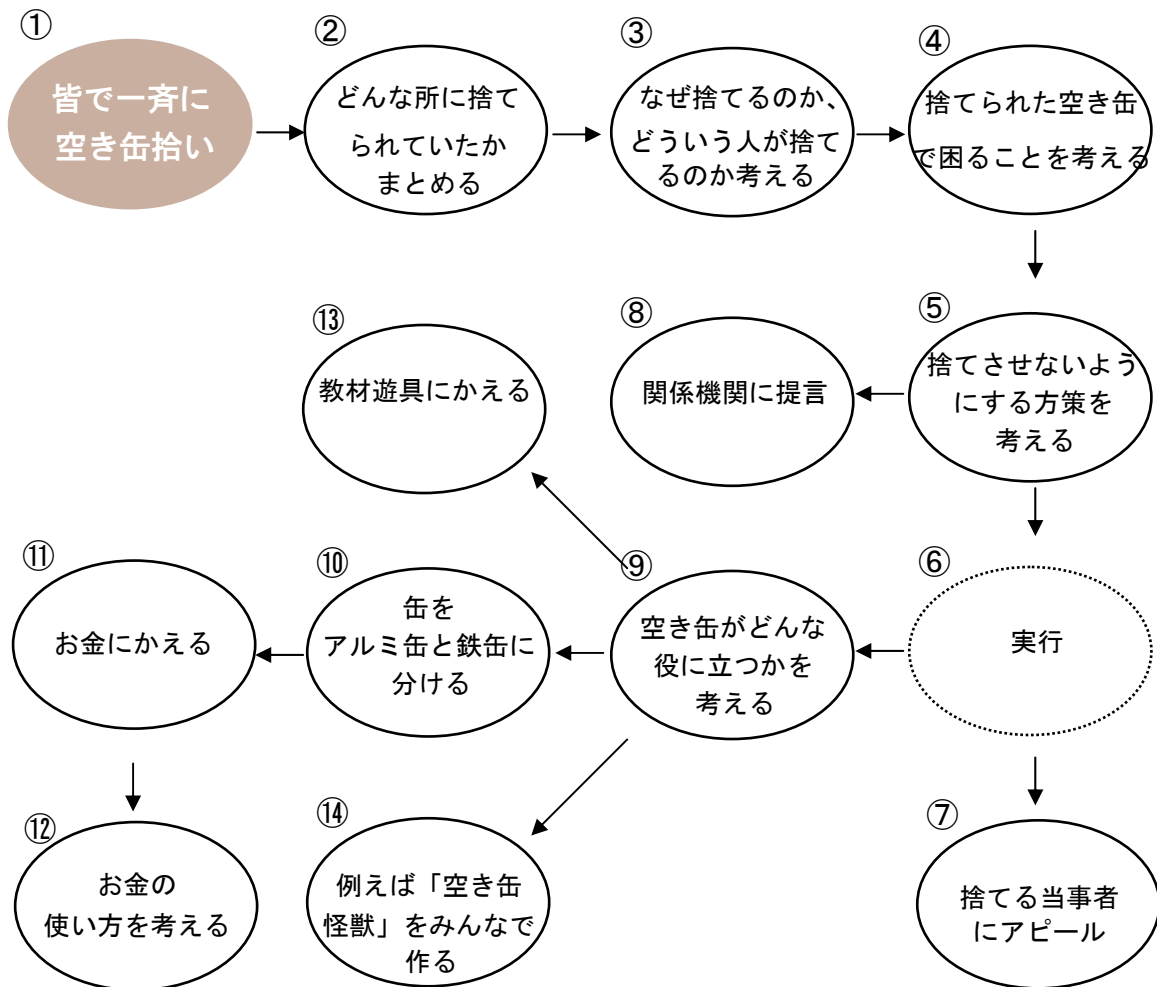
- ①と②は、活動に入るときにの心構え、動機付けの問題。
 ③と④は、活動対象の見つけ方。
 ⑤と⑥は、1つの活動から次の活動へ発展していくときの心得。
 ⑦～⑫は、充実した活動にするための心得。
 ⑬と⑭は、活動対象との関係のあり方である。

活動を充実させる方法はいろいろあるが、何よりも大切なのは、1つの活動にとどまり続けるのではなく、次々と発展させていくことである。1つの活動の中で、必ず次の取り組みテーマが生まれてくる。それに気づき、そしてまた新たな一步を踏み出すかーが問われることになるのだ。

- ① 「初めは「誰かに誘われた」でもいい」
- 「活動は自発的に」と言われるが、私たちは誰かに誘われて活動に入る場合が多い。それでもいいではないか。その後だんだん自分なりの役割をみつけていけば、結果として「自発的」になっていく。
- ② 「動機も厳しく考えるな」
- 「活動するにはボランティア精神がなくては」と主張する人がいるが、そんなに固く考えることはない。動機は不純でも、活動する中でだんだんとボランティア精神が育っていけばいいことなのだ。
- ③ 「まわりの気になることがヒントだ」
- 活動の機会は、あなたの足元にかけている。「気になること」「気になる人」にヒントがある。気になるということは、そこに活動のテーマがあるということなのだ。それに気付けるか？
- ④ 「活動は探すのではなく見込まれる」
- 活動は自分で探し出すものと考えがちだが、じつは相手から見込まれるものなのだ。相手はちゃんと見込んでくる。それに従えばいい。ということはまず、私たちは「見込まれる」ような人にならねばならない。
- ⑤ 「小さく始めて一歩進める」
- 大がかりな活動ばかりを探していると、なかなかよいテーマが見つからない。むしろ足元の小さな活動テーマにとにかく取り付けてみた方が現実的だ。そこから次のテーマに発展させていけばいい。
- ⑥ 「次の一手が大切だ」
- 1つの活動に手をつけたら、それにいつまでもこだわって、必ず生まれてくる次のテーマにしっかり取り付けていく人が、真にボランティア精神を身につけた人といえる。
- ⑦ 「楽しくやる工夫を」
- ボランティア活動だからと、きまじめにやる必要はない。活動の内容はまじめなのだから、やり方は思い切り面白いものにしたらい。空き缶を拾って怪獣でも作れば、もっと拾いたくなるものだ。
- ⑧ 「みんなで取り組む知恵を」
- ボランティアは学校の「ボランティア部」か「JRC」がやればいいというのは大間違い。むしろ全校生徒で取り組めるように働きかけるのが「ボランティア部」のもともとの役割なのだ。
- ⑨ 「グループでの自分の役割を探せ」
- ただグループに入り、あとはリーダーの指示に従えばいいというのは困る。そこで自分なりの役割を見つけ、またグループとしてもっと豊かな活動になるように自分なりに努力する必要がある。
- ⑩ 「1つの活動にとことんこだわるのもいい」
- あれこれの活動に手を出すよりも、1つの活動をとことん発展させてみた方が、実りが大きい。

- ⑪ 〔 ふれあいは集団よりもペアで 〕 集団対集団で交流しても、お互いに得るものは少ない。やはりペア方式で。
- ⑫ 〔 活動するだけでなく「考える」ことも 〕 活動中に感じた疑問を大事にする。
- ⑬ 〔 見返りを求めた方がいい場合も 〕 活動は相手から見返りを求めてはならないと言われるが、相手の立場を考えたら、逆にこちらも何かをしてもらう方が喜ばれる。
- ⑭ 〔 やってあげればいいのかというものではない 〕 施設の方は「やってもらい慣れ」ている。それがその人のプライドを傷付けている。プレゼントするよりも、何かしてもらうことを考えよう

< 1つの活動をとことん発展させる—事例>



活動を豊かにするもう一つの「コツ」は、1つの活動をとことん発展させることである。発展させるほど、学習効果が上がるし、社会の役にも立つ。

ここに紹介したのは、「みんなで一斉に空き缶拾い」という、単純な活動であるが、知恵を働かせればここまで発展させられる。先程の「いじめ」の問題と同様に、活動に豊かな広がりを持たせれば、単なる社会活動だけでなく、芸術活動にだってなり得るのだ。

4. 活動のチャンス—穴場はここだ！

児童生徒の福祉活動といえば、いくつかのパターンに限られている。学校での募金活動、地域でのふれあい活動など、変わりばえがしない。しかし、もっと細かく見ていけば、彼等のまわりにたくさん活動チャンスが転がっているのだ。

(1) 「学校」が身近な「社会」

児童生徒にとって、まず「学校」が身近な社会である。「クラス」だって、そこを社会と考えれば、できることはいろいろあるのだ。

- ① 病欠の友だちを励ます
- ② 友だちの悩みを聞いてあげる
- ③ 得意な教科を、苦手な級友に教えてあげる
- ④ 障害のある友だちの送り迎え
- ⑤ 入学したい障害児の受け入れ運動も

(2) 家庭の一員としての役割も

「家庭」もまた、子どもにとっては重要な「社会」だ。そこでただ「保護」されるだけでなく、できることで貢献する必要がある。いまの「福祉活動」は、こういう足元のテーマを無視して計画されている。

①わが家の営みだって立派な「社会」活動だ

- ・ 幼い兄弟の世話をする
- ・ 家事を分担する
- ・ 祖父母を親と一緒に介護する
- ・ ときどき祖父母に会いに行く
- ・ 単身赴任の父を電話で励ます

②家庭から社会へ

- ・ いらなくなったものをフリーマーケットに
- ・ ついでに近所の高齢者の買い物も
- ・ 祖父の死後、車椅子を寄付

③親の社会活動と一緒に参加

- ・ 母と一緒に老人ホームボランティア
- ・ 母と一緒に食事の配達

(3) 「隣人」としての役割も

ご近所の人々は子どもにとっても隣人。そこで子どもなりにできることがある。

①隣人の困り事に関わる

- ・ 登下校のついでに高齢者宅のゴミ出しや話し相手
- ・ 散歩に連れて行けなくなった人の犬の散歩を引き受け
- ・ 隣人の留守中、小さい子どもの遊び相手

②隣組活動に親と一緒に参加

- ・ 回覧板を届ける
- ・ ゴミ出し、清掃活動に参加

(4) 大人の活動グループに「入れて！」

子どもだって地域社会の重要な構成メンバーだ。とすれば、地域にたくさんできている大人のグループに子どもも参加していい。ここにも豊かな活動の場が待ち構えている。

①「子ども」であることで役立つことがある

- ・ 食事サービスグループで「高齢者と一緒に食事をするボランティア」
(食欲増進ボランティア)
- ・ 「町内会だより」づくりを分担

②ジュニア版をつくったら？

- ・ ジュニア生協、ジュニア農協、ジュニア町内会、ジュニア福祉員、ジュニアポリス(交通安全子どもの会)

(5) 「子ども」という武器を生かせ！

児童生徒は「子ども」であるという特性を生かすことも求められている。子どもという武器とは何か？

①高齢者にとって「子ども」は、存在そのものがボランティア

- ・ 食事サービスで弁当にメッセージを
- ・ 「おたより」でおばあちゃんと交流

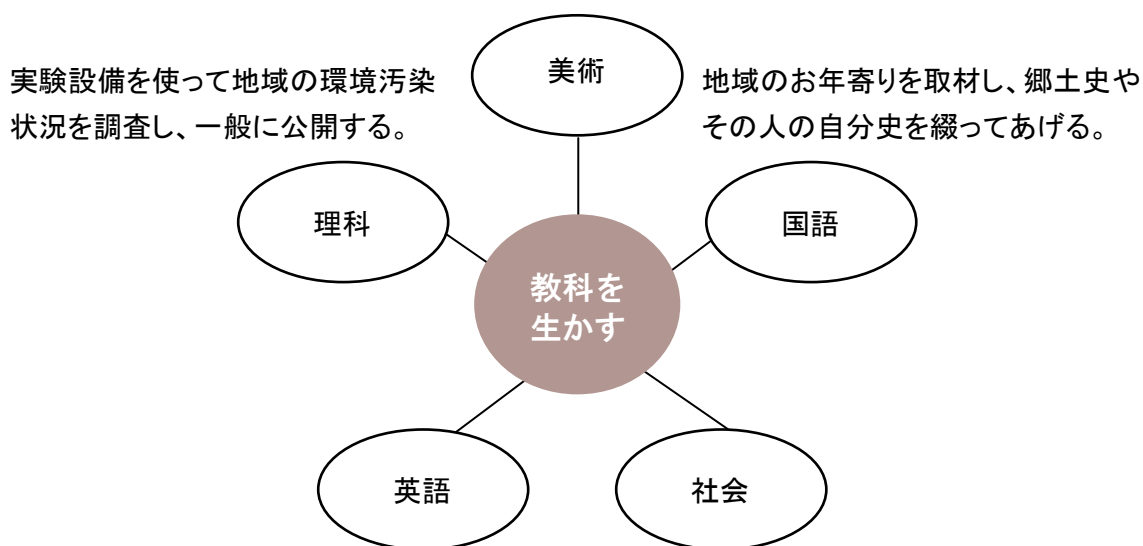
②「お兄ちゃんお姉ちゃん」としての腕

- ・ 高校生が小学生の「おたすけマン」
- ・ 児童館で高校生がにわか指導員
- ・ 子ども会活動の指導員としても
- ・ 保育園では「おじちゃん」役として
- ・ 地域文庫の管理運営役までも

(6)「学生(生徒)」という持ち味を生かせば

学校活動というと、生徒会活動を思い浮かべるが、考えてみれば、各教科、委員会、各種行事、部活など、多彩な活動の場が展開している。その一つ一つを大事にしていけば、活動のチャンスは無限にといいいほどあるのだ。

老人ホームや障害者施設に行き、そこで
絵のテーマを見つけ、お年寄りの似顔絵等
を描いてプレゼントする。



海外帰国子女と交流し、海外の文化などを教えてもらい、文化祭で共同発表する。

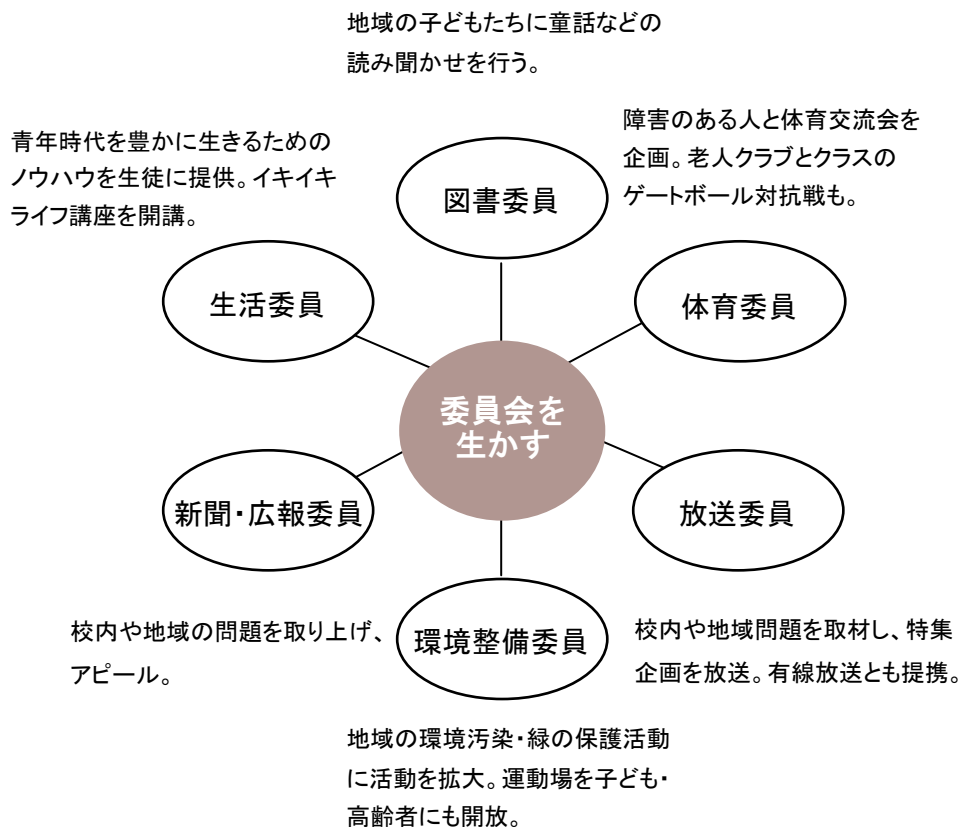
お年寄りに取材して郷土の歴史をまとめ、郷土資料館を校内に作り、公開する。

①教科を生かして…

アメリカでは、図工の時間にノコギリやカンナを持って老人ホームに向き、高齢者一人ひとりに希望のものを作ってプレゼントして帰ってくる。学習と活動が一体になったあり方もいいものだ。

②委員会を生かして

学校に各種の委員会ができているが、これも大きな役割を果たせる。放送委員会が地元のお年寄りから昔話を聞きだし、それを電話局と提携して、テレホンサービスとして地域住民に聞かせている学校がある。こう考えると、校内にボランティア関連の部を作って、そこで活動するという方法もいいが、こうした学校で各自が受け持っている役割を生かすようにすれば、もっと気軽に取り組めるはずである。



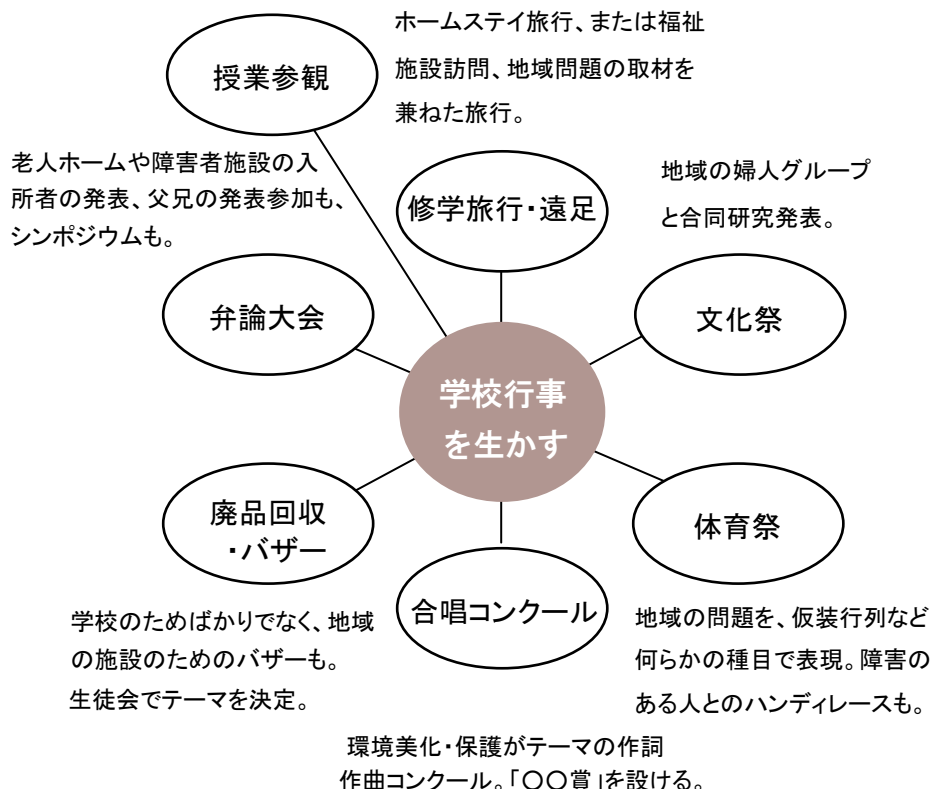
③学校行事を生かして

1年の間に学校でもいろいろな行事がある。その行事を生かせば、様々な活動ができる。校内行事とは別枠で社会活動をするのではなく、校内に限定した行事の中で、あえて社会活動の機会をつくるのが大切だ。

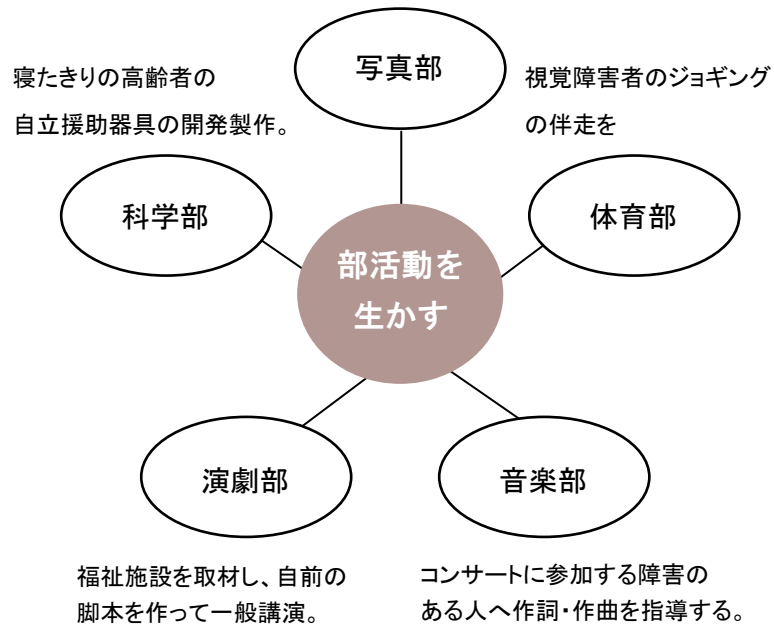
④部活動を生かして

部活動で発揮している腕は、生かし方によっては素晴らしい能力である。バレー部が視覚障害者と一緒に盲人バレーを楽しむとか、陸上部が視覚障害者のマラソンの伴走をするというように、その部でしかできないことがあるのだ。「モチはモチ屋」という、そのモチ屋の腕をできるだけ発揮しよう。

家庭や地域のホットな問題をテーマに生徒が
班ごとに問題提起し、父兄と合同で討議。



地域の問題を取材し出展。
または独自に写真集を出版。



では福祉教育をどう実践したら？

●老人ホームを訪問すればいい？

これまで、福祉教育は思いやりの心を育むことだとして、老人ホームを訪問したり、障害児と交流したりしてきた。空き缶拾いや校内の美化など「これが福祉教育」なのか分からないものもある。とにかく地域や人のために何らかの貢献をさせればいいと考えられてきた。しかし本書にあるように、福祉教育はそんなに狭い概念ではない。「福祉」という営みを丸ごと体得させなければならないのだから、いろいろな角度から取り組む必要がある。

●生徒にやさしい学校を作ること

「生徒にやさしい学校」をつくることも福祉教育とつながる。この「生徒にやさしい学校」をつくるのがいかに難題であるか。「生徒の主体性を尊重する」にしても、どの学校にもこのテーマに即した課題が一つはあるはずだ。それに取り組めば、立派な福祉教育になる。

いじめの問題でもいいし、食生活や家庭環境の問題にしても、生徒に共通した課題がある。それを生徒自身でどう解決していくのか、考え、実践させるのも福祉教育だ。

●どうせ施設訪問をさせるのなら

老人ホームでのボランティアや障害児との交流も福祉教育には違いない。しかしただ施設を訪問すればいいわけではない。福祉を学ぶには一定の手順があるし、体得させなければならない要件がある。その要件を包括的に具備させる教育プログラムを組み立てる必要がある。

老人ホームでボランティア活動をさせるとなれば、今の福祉体系での老人ホームの位置や、それがなぜ必要なのか、利用者は幸せなのか、なぜ在宅生活ができないのか、どうすれば在宅生活を継続させられるのか、などを併せて学ばせなければ、本当の福祉教育とは言えない。

●要は「人間を大事に」の教育だ

福祉は一言で言えば「人間を大事にすること、その尊厳を守ること」だ。それが損なわれていたとき、どのようにして取り戻させるのか、これを生徒に体験的に習得させるのが福祉教育だ。人権感覚を練磨させること。この一点が揺らがない限り、どんな教育題材を選んでも構わない。本書をヒントにして、各学校で独自の授業を組み立てていただきたい。